

論文の内容の要旨

論文題目 日本社会における「戦争死者供養」と怨親平等

氏名 李 世 淵

本論文は、〈怨親平等＝「敵味方供養」〉説を批判的に検討し、「戦争死者供養」をめぐる日本社会の伝統の一端を探ってみたものである。具体的には、怨親平等の文言を介して展開した「戦争死者供養」の論理を「怨親平等論」と想定し、その歴史の変容を跡づけた。また、近代にいたって怨親平等の文言が急浮上した経緯を追跡し、さらに文禄・慶長の役(壬辰倭乱)直後に高野山奥の院へ建てられた高麗陣供養碑をとりあげ、「敵味方供養」の事例研究をも試みた。

仏教典籍に頻出する怨親平等は、古来日本社会にもよく知られていた。たとえば、最澄、空海、明恵、法然など名立たる僧侶たちが様々の文脈で怨親平等を援用したのだが、怨親平等を「戦争死者供養」の場へ持ち込み、「怨親平等論」というべき言説をはじめて説いたのは、渡来僧の無学祖元だった。祖元は、蒙古襲来で犠牲となった「戦争死者」を供養する場で、仏教的原理からすれば敵味方の区別は意味を有さず、したがって「戦争死者」一般が平等に救済されると力説した。

祖元によって打ち出された「怨親平等論」は、祖元の法脈を汲んだ夢窓疎石によって大いにとりあげられた。ただ、その中身には相当の変化が認められる。疎石の「怨親平等論」は、生前の怨念を打ち払うよう「戦争死者」を説得する文脈のものであり、具体的には、後醍醐天皇怨霊を慰め諭す脈絡のものであった。疎石の真意はともあれ、彼の理屈は、当時怨霊鎮魂を導く境遇に立たされた足利将軍家にとって怨霊無害化の論理として読み取れるものであった。

南北朝の成立以来高まってきた、怨霊鎮魂における足利将軍家の位相は、義満時代にいたって「一人」と押し上げられたが、このことと連動し、疎石流の「怨親平等論」は夢窓派禅僧たちに受け継がれ、北条高時、足利直義、山名氏清の怨念を鎮める文脈で説かれ続けた。要するに、南北朝時代の「怨親平等論」は、怨霊鎮魂における足利将軍家の位相変化を背景に、怨霊無害化の論理として展開したのである。疎石流の「怨親平等論」は、中世後期にいたっても「五山文化圏」で記憶されていたが、それが社会一般へ広がることはなかった。

「戦争死者」を軸にする中世の「怨親平等論」は、大坂の陣や島原の乱などで継承されず、長き平和時代の到来とともに断絶する。ただ、怨親平等の文言自体は、近世を通してむしろ幅広く

流布していった。中世において怨親平等はまず禅僧たちに馴染みの言葉だったが、近世の場合、祖師信仰、教学振興、出版文化の三つの要素を背景にしつつ、仏教界一般で再三認知されていた。宗派をとわず前触れもなく、怨親平等の文言を援用する近代の僧侶たちの態度は、近世における怨親平等の用例の幅広い流布を背景にする。

近世における怨親平等の用例に鑑みれば、怨・親の対立構図が浮上する明治初期に「怨親平等論」が語られても不思議でない。だが、「怨親平等論」は、西南戦争期になってはじめて復活する。この動向は、官賊の峻別という明治政府の方針や、その方針に追従せざるをえなかった仏教界の境遇によるものであった。

西南戦争期において怨親平等は、供養主体を軸にする文脈で援用されたり、摂受不捨する仏の立場を言い表す文脈で援用されたりした。このことは、〈怨親平等＝「敵味方供養」〉説の淵源が西南戦争期まで遡ることを物語るとともに、近代の「怨親平等論」が複雑な文脈を伴うものであることを示唆する。

怨親平等が西南戦争後にも説教の場でしばしばとりあげられるなか、日清戦争が勃発する。「文明」の戦争を貫き通そうとする政府の方針を踏まえ、仏教界でも「文明」の精神としての怨親平等が爆発的に語られてゆく。近代における怨親平等の急浮上の原因は、赤十字をキーワードとしつつ国際社会へ進出しようとした政府の態度や、それに積極的に対応しようとした仏教界の姿勢にもとめられる。

さて、「敵味方供養」の場で怨親平等は、宗教的文脈で語られる場合もあったが、よく政治的文脈で語られた。「文明」の行為としての怨親平等供養は、天皇の「仁」「慈」へ収斂されつつ、「文明」の戦争を正当化する装置として機能した。一方、怨親平等は味方供養の場でも語られ、「敵味方供養」のニュアンスをもつ挿入句として援用されたり、「戦争死者」への語りかけとして援用された。前者は、生者を軸にする「怨親平等論」が主流だったことを示唆し、後者は、にもかかわらず、死者を軸にする中世的文脈が生き残っていたことを物語る。日清戦争期に見出される、以上の内容は、日露戦争期にも認められる。

第一次世界大戦が勃発し、日本がドイツと交戦すると、仏教界では再三怨親平等が語られはじめる。この時期の「怨親平等論」のキーワードは、「世界」「平和」だった。仏教界は、世界平和の情勢を踏まえ、「世界」「平和」を祈願する「世界的追悼会」を開催し、自らの存在感を国内外へアピールしようとした。それは、表面上宗教的文脈でなされたものだが、仏教界なりの「政治」とも読み取れる。

近代の「怨親平等論」は、満州事変・日中戦争を経ながら転回する。中国大陸への侵略を繰り返した日本政府・軍部は、「敵味方供養」としての怨親平等を宣撫工作の一環として位置づけていったが、仏教界もこの動向に積極的に対応した。中国大陸での戦線が拡大するにつれ、「怨親平等論」の語りの場は狭まれてゆき、この時期の「怨親平等論」は、もっぱら「日華親善」の文脈で語られた。それは、具体的には、「我々日本人は怨親平等の見地から中国人戦死者をも供養してあげている、あなたたち中国人も怨親平等の立場から日本人への怨みなど捨ててほしい」、という内容のプロパガンダだった。

アジア太平洋戦争期に突入すると、満州事変～日中戦争を通じて浮彫りとなった怨親平等の政治的文脈が一層強調されるが、その過程で脚光を浴びたのが興亜観音である。興亜観音は、昭和戦前期に軍官民一体の形で展開した観音信仰運動と、宣撫工作としての「怨親平等論」が結びついたところで出現した。松井石根による熱海興亜観音の造営を皮切りに、数々の興亜観音が「日華親善」の表象として作られ、日本各地や中国などへ迎え入れられた。

以上のように、「怨親平等論」は、怨霊鎮魂、「文明」、「世界」「平和」、「日華親善」など、日本社会が抱え込んでいた懸案へつながるキーワードを介して展開した。一つ見逃せないのは、中世以来の「怨親平等論」が、ほぼ例外なく、公権力の動向と密接に関わっていた点である。個人レベルの宗教心を丸ごと否定することはできないが、日本社会の「怨親平等論」の場合、それは純粋な形で保たれず、無意識的に政治へ動員されたり、自覚的に政治へ接続された。

さて、本論文では、「怨親平等論」の追跡に引き続き、「敵味方供養」の事例研究として、高麗陣供養碑の建立経緯や、その後の流転ぶりを考察した。高麗陣供養碑は、慈悲と戦功顕彰とい

う二つの文脈が混淆したところで誕生した。戦勝記念碑としての高麗陣供養碑は、生者中心の世界観へ傾きつつあった中・近世人の心性を象徴するモニュメントだった。高麗陣供養碑をめぐる複数性は近世にも受け継がれ、近世人は高麗陣供養碑を慈悲・靈験・戦勝記念碑の視点で眺めていた。

だが、近代に入ると、近世までの複数性は表面上消え去り、高麗陣供養碑は、まず日本社会の慈悲＝「文明」を象徴する史跡と位置づけられた。高麗陣供養碑が日本の赤十字条約加入過程で決定的な役割を果たしたという説の流布は、近代日本社会における高麗陣供養碑の立ち所を如実に物語ってくれる。

〈高麗陣供養碑＝慈悲＝赤十字〉という認識が通用するなかでも、「敵味方供養」をめぐる前近代的文脈は、日本社会の底流で脈打っていた。高麗陣供養碑は、前近代社会の朝鮮蔑視観などを背景にしつつ、耳塚とともに戦勝記念碑としても目された。同じ頃怨霊への感覚も確認でき、「敵味方供養」をめぐる「執拗低音」は近代日本社会でも響き続けたことがわかる。このことは、「怨親平等論」が近代を境に生者中心のものへと変容を遂げつつも、中世的文脈、つまり死者の目線に沿った論理を保っていたことと符合するものといえる。

怨親平等をめぐる、日本社会の伝統を構想することは不可能でないが、その中身はより慎重に見定める必要がある。怨親平等という文言が「戦争死者供養」の場でよく援用され、「怨親平等論」というべき理屈が繰り返し展開したことが、日本社会の伝統といえよう。ただ、同じく「怨親平等論」といっても時代的変容がみえることは、上記した通りである。通史的に眺めてみれば、近世を軸にして、死者・聖中心から生者・俗中心へ脱却しようとした中世の「怨親平等論」と、生者・俗が死者・聖を圧倒する近代の「怨親平等論」に両分され、近代の「怨親平等論」は、さらに中世的感覚が見え隠れする日清・日露戦争期と、「戦争死者供養」の場に参じる生者たちがクローズアップされる満州事変以降の時期に両分できる。

「戦争死者」をふくめ、ある存在の不在について何らかの意識をもつことは、きわめて重要な感覚である。慈悲であれ、畏怖であれ、単なる後ろめたさであれ、この感覚は、認識主体の現実生活に一定の自己規律を与えるはずである。管見の限り、この感覚は、「執拗低音」として日本社会に生きており、これからも諸方面において日本社会の底力として大いに働くものと信じる。ただ、この貴重な感覚が、政治的文脈で勝手に動員されることについては、強く警戒しなければならないだろう。日本社会の伝統としての「怨親平等論」の生命力も、この感覚の純粹性を必死に保つことによって担保されるだろう。